



官板  
玉石志林  
一

イ 4  
3165  
1



目次

無人島徒民記 并附考

エ|ン|グ|及|カ|ン|グ|暹羅國の連身仔子

大地磁石極の發明

婦人イダへもへル地球周遊の記

支那の香港島

支那志林 卷一 目次

支那の香林  
海入島封者記  
大島湖の湖の湖  
海入島封者記

玉石志林卷之一

無人島徒民記

千八百四十五年刷、荷  
蘭瑤函第百一二三葉

一地方の形勢を記し、一人民の風俗を述る一科など、其行事  
實驗の世は棄てざるものならず、就裡亞弗利加と繞りて行  
く海路を見出せし後二百年の間ハ、太平海中、小島嶼の無數  
群を爲る者又在てハ、人の心を著るもの甚稀なり、其遺す  
所舉て見る可らざるや、是班呀アカビルコリウ呂宋諸  
島へ行く海路まで、多く群島を發覺せるハ、吾人の知る所ハ  
して、ロルドアンソンのガルヨトト  
一船の船中にて、見ざる圖

小見えたり如く、其群島は數種の名を命ぜり、然るとも、是班  
 呀人、是海島なり、金銀を見出すをふけむ、其島を取り領し、  
 人民を移徙して、力を竭すも、勞して功ありと思ひ、尼達蘭人  
 ハ力作を事とし、交易を以て世は名ありて、此念ふけむとも、  
 此島嶼は主とるを求る心あり、太平海中の諸島の如く、ボニ  
 人の群島も、當時是班呀和蘭人の早く已に知る所とふれ  
 り、是班呀人ハ、此島をイスラス、デルアルソビスポと名つけ  
 或ハ別名を命ぜり、又別國人ハ、此群島をウーステ、エイラン  
 テンと名つく、此ハ、日本名のボニン又モニンジマの名を簡  
 易に反譯せり、よて、人の栖止せざる島と云る義あり、歐邏巴

人の此海中、來らざる久しき前、内裡の臣下より、此島を見  
 出し、よる人をヲガサヤラ小笠原と云し、以て、是を其島名  
 とふれ、より日本人屢イ豆イダ歟より、彼島に至りて、人民を  
 徙植せんと欲し、より、一千六百七十五年、東方諸國の歲刊文  
 中、長崎の三士人の行事を記せり、其人ハ、此群島の土地を  
 測量して、度學に據り、檢索して、一圖を作ふ、是は諸島諸島礁  
 の精密なる記録を附す、其島の數、八十九を見出し、より、當時  
 此島は居住せる人ふきを以て、是をボニン島と名つく、日本  
 人此名を傳へ、是より以後、其前は名つけざる島名皆廢す、昔  
 より日本は、其近傍の人の通行す可らざる群島は罪人を流

徒する風習あり此の如き流徒を攀躋す可らざる八丈島も爲り此島ハボニン島の近傍に在り此島の高ハ十江ルと云ふを以て此く名つくるかり新見出せし群島ハ日本人の言ハ依まハ復々同様流徒の地は用ふるべし盗賊兇犯と多く此島は徒し土地を墾闢せしめしが此凶惡民戸此肥沃なる島にて好便宜を得稼穡を興し速に數箇の郷黨を結ひ千六百年代の半小及てハ日本の圖中已に此群島は家と營きて村落を成せしと載する者あり然とも此く其民を流徒して永く後來は傳らず五十年より六十年後にして再ひ以前の如く無人島とふりともハ何の故ふるを知らず凡此島氣

候平和にして許多の産物を生ずる地ありとも敢て此を論ずる事なく吝嗇ふる政は從へる政官甚と遠隔せる處領と棄ん事を議せし故あるべし此島の中の二箇ハ異常に膏腴ふるを以て多く世に稱せらる其餘ハ大半崑石廣野なり其中一二島ハ山谷互に出て景致多く許多の清淨ふる小川其中より流れて出て漸次は海中に入る此山の周圍は草木を生し就中蒲葵多く生ず多くの砂灣ハ緑色の鵜群集し砂濱變じて一面は綠色と成に至る大約此地方の海中ハ魚類意外は多く捕鯨の爲に歐邏巴の船此處小來り崑石及び海濱ハ蟹蝦貝子類ス

トラペン、鵜、コノルラー子魚名 不詳野鳩、其他の諸鳥多し、甲比丹  
 ベーサー千八百二十七年、此島に至り、イスラス、デル、アルソ  
 ビスポと云る是班呀名を命じ、亞細亞人の述る處ハ、常ニエ  
 ウロパ人の疑い思ふ所あるを以て、此島若ハ無人島ならん  
 と思へり、此荒る島の様子と位置とを、アールツビス、プ  
 グ云る群島の説と比較し、其時、人毎ニ疑もふく、日本人と歐  
 邏巴人の云る者ハ、同物あるとを知らず、蓋歐邏巴人ハ、此時  
 までハ、此無數の群島の一二ニ至る耳にて、悉く之を委く  
 せず、漫々之を知盡せりと思へり、此を以て、日本  
 人と西方の海客の記す處と、小異同ある故を知り、恐くハ、

日本人も亦天度の數を正しく度らず、八丈無人島の間、距  
 離の記載、誤有るべし、  
 ペーサー、グミニストルペールと云る名を命ぜり、此島の  
 島上ニ、近頃來著せる捕鯨船中の英吉利船卒二名、隨意ニ殘  
 り留りたり、其一人ハ、英吉利産の人、又一人ハ、ラギサより來  
 り、其名をマテヌモサロと云ふ、英吉利の海客の曰く、此島分  
 て北中南の三部とある、北緯二十六度五分より二十七度  
 四十四分三十五秒に至る、恐らくハ、此度よりも更に猶廣行  
 るべし、二人の船卒が逗留せるペール島ハ、其中部ニ屬す、  
 其島の港ハ、ビス、マ、プ、マ、ン、ヲ、キ、ス、ホ、ルトの名を用ひて、ルロ

イドと名く、其地の北緯二十七度五分三十五秒、グロウ緯度偏東一百四十二度四分三十秒に在り、其港は甚と濶く、且風淫を避るゝ安穩あり、

加必丹の船發程せし後、直ち二人の船卒ハ、サンドウス島に赴き、米里堅人二人、ゴキガ噠國人一人及タメハメハ三世の臣人若干、即ち男子五人女子十人を移し、己と共にボニン群島上り其居を占む、一千八百三十年彼の五月二十一日、其火伴總て二十人まで、ハウイ又ヲウイヒと出帆せり、此地ハサンドウス群島中の最大島なりとて、其名世々著り、是數年前より、ハウイス、ツースコウ空ルと題せる日刊紙を刻行せりと云

ハ、英吉利の領事官リカルドカルトンと云る者、此ボニン島徒民に、合衆の旗を與へ、且彼等ハ、國家の爲に力を竭せる者なる由の確證を與ふ、是を自己の費用を以て、ボニン島に人々と徒植せんが爲に、危險の地を履き、是を與へしるなり、上り云る二人の酋長が引率せる人衆の外、此人衆を載て、ボニン島へ行し、スクー子ル船中の人々、此中に加はる、其人口、總て三人、内アメリカ人一人、サンドウス島人二人とす、是に於て、總人數二十三人とふる、一千八百三十一年、英吉利の捕鯨船侶の中より、九人此社に入り、一千八百三十三年、此島の近傍に於て、アメリカカウトルソレ名號捕鯨船難船し、此

船の人衆の中、十二人此島に上り、命を全ふせしが、内四人此島に留らんと心を決せり、然るに、此新島の繁昌に向んとせし徒民の業、乍ち滅絶せんとする大危急の事出来たり。

英吉利の一捕鯨船侶、其船卒を此島に留めんとす、島民強て是を拒めども肯せず、十四人をペール島に留めて去る、此者他の悪徒と謀を合して、徒植せる人民を殺し、其居住を焚き盡んとす、幸して、此悪徒半は不意に殺され、其餘の狂悪人は、シド子新和蘭東岸の新府新ソイトワレス同上の一府に放逐せりと

此新植民は、本此地に來る船より離れて、此に留りたり。

二人の船卒より始まりて、次第に蕃滋せしうども、久しく此島に留る後、彼等大率復し此島を去るを以て、久しく土著に續くを能わず、一千八百三十七年、彼の八月、ラレイグ名號船ペール島の首地ルロイド港に到りし時、其人口總計四十二人あり、其人多くはサンドウズ島人なりと云ふ、一千八百三十八年彼の五月迄は、サンドウズ島人二人の首長モサロ及びヒミルリカムブスに僱ひて力作せしが、此時より以後、南海の島人志盈ち驕りて、怠惰となり、膏沃の地甚しき勞碌を須いずして、大利益を得べきを、一切を放擲して治むる心あり、モサロ及びヒミルリカムブス曰く、每家三人、三十家の



眷族、此島一來き船に就て、衣服諸器具を買ふ足るさけの金あらば、ルロイド港のこゝ居て、各々好生意を得るに至らんと云ふ、又人謂らく、此一群島上は唯政堂より差遣せし一人の權勢を握る首長なきを以て、大闕典とせり、其故は、每人各自來着せる捕鯨船に食料を賣んと欲して、植民の内、怨惡及び不和を生じ、又ペール島土人と船中人民と、屢々議論を起すに至るばかり、是を以て、好船卒のこゝ撰り乗せしる船は、島人其船卒と鬪を起して、降らしりせんと恐るきて、是より近寄ず、是より反して、善惡を撰り、船卒と乗せしる船は、悍惡の者と、其地より遣り去り、其人土人と騷擾して、安和ふ

らめず、生理と害し、所持の物品を損傷するの危に至らむ。

ミセル名インと云ふ人、ペール島徒民の詳記と著せり、此人の記より曰く、徒民の酋長、余より男女間の小少爭論を和せんとを求む、然れども、余は公より、の權勢を握らざれば、唯こゝを諫て和順からしめり、耳なり、是くの如き害あると無んば、新植民次第に繁庶すべし、此土は今サンドウス島に居る英吉利領事官、及び直より不列顛の政堂より此を防護す、若し英吉利より、此土の太平安和を守らざるに相應ふる兵力を遣るの議、一決する時、速りて政令好らざるサンドウス島の交

易の半を割て、ルロイドの港へ移すと有んと或人の云く

ペール島<sup>一</sup>ハ、既<sup>一</sup>アールドアーケルス、ラスロ。詳ふインヂ

アーンセコレン 穀類の名 詳ふらざ 蔥、韭、ヤムス、ポムプリー子 詳ふらざ

ワートルメルリン 瓜類 蔗糖と植ると極て多し、又煙草を種藝

せんとする策あり、土人以為らく、若し煙草を植るバ、恐らく

ハ他の産物廢するも有んと云り、其故ハ、煙葉を摘み取て製

するも人手足ざまハあり、此土の煙草ハ、特抜ふる形狀の物

より、又二三株の狗椽樹あり、是ハ實を種て生せし所あり、此

樹ハ多く實を結べども、金と致すと無と以て、是を種藝せず、

家猪と蕃滋すると甚と多く、此土に來りし船ハ、肉片の大小

は應<sup>一</sup>て、四ドルラルより、九ドルラル迄は買取れり、家猪は

飼ふはインヂアンセ、コレンを用ひ、又ペール島は野猪甚

多し、サントウズ島の犬を用ひて獵を爲し、此犬獵師の指令

に隨ひて野猪を蹤跡し、極て強猛ふる野猪をも襲ひ咬む、又

禽鳥ハ闕乏ふる者あり、徒植民戸、初の遠方より將來れる獸

畜を甚と重惜して妄に用ひず、其物増息するまで待たりし

が、今の獸畜甚と蕃息して、種藝せる田野を妨害するに至れ

り、大海を以て他島と分界せる此島の南端に多くの山羊あり、

是地には馬ありとあり、唯ラレイクダ遺せる一雙あり、耳

又野生猛獐人を害する獸畜ありを見ず、又蛇あり、猫あり、然

31 多くの鼠あり、沙魚サメの海濱の洋面ヨウメンに數多居る、但し小く  
 して弱し、水淺き處にてハ、犬沙魚を咬み、乾沙若くハ沙洲に  
 引揚ぐ、  
 此地木材に闕乏ありと雖も、若し多くの人民、此處に居住す  
 ると有バ、闕乏するに至らずと云ふ可らず、若夫帆桅と爲る  
 木材ハ、一掃してあり、左マナと名つくる木あり、此木を鋸  
 て板とあり、家什を造る、懸鉤木キイチゴハ、堅實なるを以て門柱等と  
 爲る用ふ、白檀あれども、甚ど少くして記載を爲るに足ず、モサ  
 ロハ一人にて三月の間、三十ピコルス斤を取り聚む、方今  
 の徒植戸、此島を縦横に蹤跡すれども、古への土に居れる人

民の遺蹟を見るとき、

大ブリタニアの新に領せる此地ハ、今に至りて、我輿地家未記  
 載する所あり、此地ハ、不列顛人、日本に抗敵する前營とあり  
 ハ、固より、疑ふ可と無と雖、英吉利政堂日本に對し、敵對の志  
 を抱けりと言ふハ、信ず可らざるあり、恐らくハ商人及び奸  
 人の爲に催し起さき、支那に有する如く、一たび日本に向て  
 兵を發すると有んり、今ハ既し諸般の英吉利の捕鯨船侶、日  
 本の海面にて、盜賊を爲ども、罪せらるゝとあり、此船の船卒  
 ハ、半ハ獷悍不化の人民ふまバ、是等の人の是くの如き海賊  
 と爲て、利を得るもより、疑もふく英吉利後來の一趣向を生

するふるべし、日本人一二の英吉利の大小船隻を奪取り、其  
 乗り居る人民を、其邦俗に順ひて、海賊ありとして、慘酷の  
 死に至らしむるは、必ず有べき事あり、是くの如くふる時ハ、  
 英國の商人等、其政堂に請ひて軍艦を發し、日本に來り、其罪  
 を問ふるべし、今此罪を問とき、日本よりて蔑視して、之を屏り  
 ば、支那にて有る如く、暴虐を用て是を屈するの策に出る外  
 かりるべし、然る時ハ、地球上諸人民の交易を輓近に至る迄  
 鎖して通ぜざる一國、一朝に其道ひらけ、二百年來一所に積  
 累せる二千四百萬の民人、世界に散布し、徑に歐羅巴の風習  
 に薰陶するところありべし、

附考

千八百五十一年刷、ハンヘウス  
 デシ撰、地理指南卷三、日本條末、

ボニンシマ又名アルツビスポ、エイランデンハ、日本本島  
 の南東ラドロ子シ諸島の北西に在り、ボニンシマハ、林木  
 蔚茂、山巒起伏し、島嶼大都八十九、其内十島ハ、日本の植民  
 居住す、此人耕作、打漁及び材木の買賣を生理とふす、此島  
 上ハ、日本の政令及びとふし、

二 千八百四十九年刷、カント  
 ビク撰、地理讀本の第四卷、

日本島とマリアシ子シ島の間、北緯二十七度の間に、世に  
 著る、と少く一群島あり、其數八十九、但其十島の人民  
 居住し、日本の人民を此島に徙植す、島ハ山岳多く、林木繁

茂く、氣候平和、穀禾、稻米、莢豆、重價の木材數種、又打漁、田獵も其利多し、此島日本の徒種に係ると雖も、必ずしも是を其統轄の中し數へず。

三 千八百五十年刷、カラアムル  
ス撰、地理書第二冊、日本條末

ボニンエイランデンハ(又ボニンジマ又ムニンジマ又アルソビスポエイランデンと名く)日本とラドロ子ンの間に在り、八十五個里方の大を占む島數統計八十九箇、其内十箇ハ人物居住す、其至大ふる者と、北島及南島とす、ペール島、ルロイド港あり、近時英吉利より人民を徒植す。

四 バンエイキルラズ  
ズ撰、韻約地志附録

モニンジマ又ボニンジマハ、日本の南東大瀛海中に在る一簇群島あり、北緯二十七度、東經一百三十九度、に在り、此群島アベルレミユサトが紀ありて、始めて世に著り、古昔地圖ハ、アールツビスコツプ島と名く、此地ハ華麗ふる木材及ひ穀禾を産す。

モニンジマ及ひカンダ(暹羅國の連身仔子) 千八百四十二年刷、荷蘭瑤函

第三十九  
四十葉

エング及ひカンダ(互に愈著せし連身仔子ふる、エングハ圖の右に畫き、カンダハ左に畫けり)ハ一千八百十一年に、暹羅海岸の一小邨中に生じたり。○此仔子と産す以前に、其母

姿容美しき兒子を多く産り、是連身兒を産する時、少くも  
 怪異のと無りて、萬事皆常の如くふり、其兒の父母ハ、其支  
 那種とるを知ずと雖も、支那の人種とるを、容易に知り得  
 べし、何とふまば支那人ハ、前面に俯して行歩し、且其皮色、黄  
 と帯ひ、其髪、黒色とまばなり。○エング及びヒカンダハ、殊に其  
 確徴あり、是より由て、其支那の人種とると、一目瞭然たり。○世  
 人の説く如く、其父母ハ貧窶にして、捕魚を以て生活とせり、  
 一千八百二十九年迄ハ、仔子自ら漁せし魚、及び他の海錯を  
 賣り、椰子油を製造し、或ハ養禽を業としたり、此年亞墨利加  
 の甲必丹に伴ひて、亞墨利加に渡り、留ると兩月にして、英

吉利國地方へ渡海せり。○是海旅の間、仔子の一人、海中に浴  
 せんと欲せり、然るに、其一人ハ、此を好まざり、斯く其好惡の  
 違へるを、外より是を觀きハ、笑へき者甚多し、各其至情より  
 出て、已むを得ざる戯曲を演ずるなり、蓋此兩箇の生物、絶す  
 相共し生活すべし、罰と造物者より得るとを以て、其意十分  
 一和するに非ざれば、其生を保つに耐ず、其意一とび相反す  
 ると有が如きハ、兩人の爲に嗟歎す可とて、遂に不幸の  
 争鬭を生ずるに至る。○此連身兄弟の嗜好、及び思慮を一致  
 せしめんとする時ハ、定に互に相和し、幸に兄弟中、争を生  
 ずると稀なり、何とふれば、彼甲必丹中、居て、其不和を調ふ

此ハ速ニ相和するを以てなり。○其身體輕捷なるを、海上旅行の間彼疾走し升降し、踴躍せしめて、明りなり、一日、同船の人彼を其後より追し時、既し一二回甲板の周圍を遶て走り、頃し船窓を飛び踰り、其捷きをハ、健足の水夫と雖も、辛しして之に從ふ計りなり。

此兄弟の其體を連ぬる處ハ、其胸にある手掌大の肉瘤なり。○此瘤ハ、胸骨より生じりと見ゆ、但し其胸骨ハ、胸空の中夾を前面より掩ひ、其下邊ハ、劍狀軟骨と成て、胃の處に迄下行ふ、此肉瘤ハ、二人相持の部より、兩體間に懸鉤せり、初生の時より、此部甚柔韌なり、是を以て、其雙兒隨意に左右上下し、回轉するを得、由て意ふ、其臨盆の際、一兒の頭ハ、一兒の足の方に向て、出産せるるべし、然れども、其後回轉して、初ハ其

下し回轉するを得、由て意ふ、其臨盆の際、一兒の頭ハ、一兒の足の方に向て、出産せるるべし、然れども、其後回轉して、初ハ其

連身  
孖子  
エング  
カンダ



て、初ハ其  
顔面、殆ど  
相對せし  
が、後絶へ  
ず互に相  
離れんと

欲するの情ありし由て、此瘤甚ど延長し、長ずるに及びてハ、互に并立つし、至れり、然れども、彼其腕を互に組み、互に其一

手と肩と搭して、其兩手ハ前兩手ハ後と置けり。○故に右人ハ右手、左人ハ左手と自由と使用す。○然れども、其兩個の後手と前と出得べく、加之其瘤の柔靱ふる由て、其位置と變換し、エングハカングの左へ行ふカングハエングの右とふることを得、是より由て、亦其手を變換し用ふるに自由なり。○然れども、此位置ハ、甚牽強ふるを以て、常に速く、再び通常の位置と復る。

カング及びエングハ、其行歩坐卧疾走游泗に於る、一人の如く、其生機官能、一心の使令に従ふ如く、總ての運動を同時に作らる。○其他彼同一趣向を具へ、一樣の希望をふり、一樣の

需索を起し、是と同時に一言ひ出すなり。○其甲人未曾て、乙人の睡眠するを見ず、何如とふまば、同時に睡り、同時に覺る。○加之人或は彼の睡を覺さんと欲する、甲人を驚寤すれば、乙人も同時に醒覺するなり。○エング睡中疲瘁し轉側せんと欲する時、自らカングの軀を踰へて左に轉ずれば、カングも同くエングの下より右轉り、此運動の間、絶へて兩人の睡を妨ぐるをふら。○此諸件ハ、兩個の生物、只一人に成れり如く契合し、又睡眠中、足と屈伸して、謾に動轉するに、亦絶て些少の妨を見ず。○此兩兄弟絶て互に譚話するをふく、一二人の號を爲ともふり、人傍觀して、何如して、其意衷を通ずる



やと、測り知ると能はず。○彼十八歳の年、其本國を出と雖も、  
 斯く互に咄黙する小因て、其本國の語を全く遺忘し、○  
 彼ハ他國の語を學ぶに難らざる事と見え、歐羅巴に滯留  
 の時、當てハ、好く英吉利語して話し、既し又少許の佛蘭西  
 語と會得し、始むるに至れり、其面貌ハ、總て相肖同一、人其聲  
 と聞き、其口の動くを見ざれば、兩個の兄弟、孰れり話説する  
 やと、辨別するに能はず。○一千八百三十六年、エングカング、  
 歐羅巴に周遊せし時ハ、其年二十五歳なり、二人の骨格甚  
 端好筋力強實、其一人ハ、身材稍高く、且稍肥大なりと雖も、概  
 するに五尺許、其短少なる者も、隨意に甲人の肩に搭するを

妨とげず、○其他カングの血液運行ハエングより速なり、カ  
 ングの脉動ハ一分時に七十動、エングハ八十動なりと以て、  
 是と知る、其髪とハ、其本國の俗の如く、後頭にて結束せり、  
 又其滯留せる國にて、各國の常服を服せり。○其體、愈著せ  
 る部分の外、異なる所あるを見ず、其愈著部の爲に、俱に其襯  
 衣中に一孔を穿てり。○肉瘤の長、上端ハ太抵舊尺の二寸許、  
 下端ハ四寸許、其幅ハ三寸許にして、其尤厚き處一寸半なり、  
 ○此連接せる部の奇特なるハ、其瘤の中央を刺し觸る、時  
 には、其兩人同時に其刺し、と覺ゆ、中央より少く右、或ハ  
 左に觸るれば、獨、エング、或ハカングのみに是を覺ゆるなり。○

此奇特なる事一依て、醫師或ハ斷一て曰く、少一も害を貽す  
 と無一て、此兩兄弟を分斷するに、難らずと云一り、  
 此孖子天賦の筋力、自ら同一からざり一故一、エングハ尤も  
 剛強を以てカングを指揮一、特一其兄長とふり、カングハ其  
 筋力これ一譲り、好んで其指命一従ひ、弟禮を執る、是を以て、  
 其軀分れて二人ふりと雖も、恰も一人の如く見え、又只一人  
 の精神を賦せられ一者の如く見ゆ、○加之其一人病一罹る  
 時ハ、他の一人も是を悩むと見とる、○又或時、一回カング  
 と瀉血せ一時一、エングハ、其身の違和を覺え、其後も快暢ふ  
 らざりきと云一ふ、

大地磁石極の發明

千八百五十二年刷、荷  
 蘭瑤函第五百五十五葉

造物者有形物の世界一於一、一普通の力徳と萬物一賦與  
 一、其陶冶の徳を表一、其高妙なる志業と達せり、是と同く、亦  
 無形の精神を總攝する一、其嗜好する所ハ、心を凝一慮と殫  
 一して、已んと欲一して能ざるの情を以て、吾人知ず覺ず、人間凡  
 百の事業を舉行よハ、此情ある一由ふり、然れども、造物の此  
 一定せる法制一循ひて行よ一りも、人をして其心神を陶鑄  
 一して、高妙の天徳一達せ一り、又且人間の禮俗を成一、智見を  
 長ぜ一むる、第一の本源ハ、福利を徼むる人情の外、凡そ吾人  
 の五官一て、知覺すべき萬物、盡く其淵源を探り覓んと、深く

好く、厚く嗜む心も在り、此嗜好ハ、大凡吾人の學業も進修する淵源として、閔麗ふる究理發明の中、輒近一箇の發明、數百年の久しきを歴て、徒らに造化の法制を究んとして、遂に未其底蘊を發する能はざる物も在り、現に一步を進むるを得ざるハ、此嗜好の徳も由れり、其法制ハ、他も非び、吾人大地上に見る所の磁石の景象を發起する所以の造化の法制、是なり、○凡物ハ、其根本する所無して成之の非ざる時ハ、大地の磁石力も亦必ず其然る故の根本有ざる可らず、○今器械を用ひて、高く拽升せる物體の下り墜る運動ハ、其一定せる法制に順ふ、此法制ハ、物體を運動する、世に顯著ふる力勢を以

て、是を算する、然る時ハ、實に現存せる磁石原質の由て以て、其作用を發する所以の法制も、蹤跡する者あると明かり、此大疑團ハ、實に猶消釋するところ、今も常に大地磁石力の妙用を逞する所以の理も、通曉するに能はず、然れども、其力の流行する状ハ、幸に是を確定するを得て、遂に其力を發する所以の造化の法制を發明して、殆中らずと雖も遠りらざるに至れり、磁石力を緊切ふる日用に供するハ、航海に用ふる是なり、凡土地を認むべき緣故、既に絶たる渺たる大瀛海中に在り、亦航海の針路を辨ずべき日月星辰も絶て觀る可らざる時

一方て、羅針盤を以て、嚮導を爲す無ハ、海客此際一方て何と  
以て、航海の術を施さんや、然れども、磁石力の説、今より少  
前、未だ明らふらざりし間ハ、羅針盤の指す所、十分海路安全  
の指南に供するに足ず、實に疑謎の景象を垂す、故に、層  
淺の見えて、一目すれば、甚と哀むべき景象を示す者の如く  
思ひたり、

羅針盤の主用ハ、本磁石力の顯著なる性情に根本するを以  
て、轉動自在にして、浮動せる磁石針ハ、自ら其一端北に向ひ  
他の一端南に向ふと云ふ、是尋常一様、世上に行はる、説  
ふり、然れども、磁石針の方向所謂磁石子午線ハ、大地上の各

地に在て、多くハ南北の正方位なる日中線即ち星學家の子  
午線と、多少の角度を爲す、是を磁石針の躲避又デクリナチ  
ンと名づく、此躲避ハ、北極針として、正北一點より、東西に控  
く度に応じて、東に躲避し、或ハ西に躲避す、初て此躲避を實  
験せしハ、何人ふりや、詳ならず、或曰く、一千四百九十二年、閣  
龍ゴロン既して是を發明せりと云り、然れども、一千六百年代に在て、  
猶人此躲避あることを明知するに無りし、然るに、方今に至て  
ハ、此一事既に疑ふ可き者なく、歐邏巴の全西部、全亞非里加、  
及び亞細亞の一部を通じて、皆東部亞墨利加の如く、方今の  
躲避ハ、北極の西に在り、グリーンズウィキに在てハ、西の方幾

ど十七度<sup>二</sup>在<sup>一</sup>、○細心<sup>一</sup>觀察<sup>一</sup>て、大地上<sup>一</sup>在<sup>一</sup>て、其躲避彼  
 此相同<sup>ト</sup>と諸地<sup>と</sup>を曉知<sup>セ</sup>り、其諸地<sup>と</sup>を連ねて、地  
 圖上<sup>一</sup>屈曲<sup>セ</sup>る線<sup>を</sup>引く、此線<sup>これ</sup>を同角躲避線<sup>と</sup>名づく、  
 若夫躲避ふ<sup>る</sup>の線<sup>イ</sup>ツクリニスハ、大地上<sup>一</sup>て、磁石針細密  
<sup>一</sup>北<sup>と</sup>指<sup>す</sup>諸地<sup>一</sup>是<sup>を</sup>引く、北半球南半球の無數の所在<sup>一</sup>  
 於<sup>て</sup>、故<sup>さら</sup>に實驗<sup>を</sup>爲<sup>せ</sup>る後、下<sup>に</sup>述<sup>る</sup>磁石力の道路の線  
 と發明<sup>せ</sup>り、此線ハ、大地磁石力の南極<sup>より</sup>始<sup>り</sup>、北西の方向  
 と取りて、舊新二寰の間を進む、然れども、數箇の蜿蜒屈曲<sup>と</sup>  
 爲<sup>す</sup>故<sup>を</sup>以<sup>て</sup>、地上<sup>一</sup>引<sup>と</sup>る人作の經度の如く、齊整<sup>ふる</sup>の  
 比<sup>一</sup>非<sup>ず</sup>、此方向<sup>俄</sup>にプラタ河の口<sup>一</sup>到<sup>り</sup>て、變<sup>ト</sup>て北東と

かり、赤道を距<sup>る</sup>る五度<sup>一</sup>及<sup>て</sup>、再び北西の方向を取<sup>り</sup>合  
 衆國<sup>と</sup>切<sup>し</sup>、華盛頓<sup>と</sup>過<sup>行</sup>て後、大地磁石力北極<sup>一</sup>到<sup>ま</sup>で、續  
 て北西の方向を爲<sup>る</sup>かり、大地の西半球、既<sup>一</sup>是<sup>の</sup>如<sup>き</sup>線<sup>あり</sup>  
 時ハ、東半球も是<sup>を</sup>細查<sup>セ</sup>バ、現<sup>一</sup>同様の線路<sup>あり</sup>と明白<sup>ふ</sup>  
 久<sup>○</sup>此線ハ、新則蘭<sup>上</sup>の側の大瀛海<sup>を</sup>經過<sup>し</sup>、新和蘭の西端  
 と切<sup>て</sup>、印度海<sup>一</sup>來<sup>り</sup>、蘇門達刺<sup>の</sup>側<sup>一</sup>て、分<sup>れ</sup>て二支<sup>と</sup>かり、  
 東支ハ、支那<sup>及</sup>ひ東悉白里亞<sup>一</sup>向<sup>ひ</sup>、西支ハ、包社亞拉非亞<sup>一</sup>俄  
 羅斯<sup>譬</sup>バ如山<sup>一</sup>向<sup>ひ</sup>進<sup>む</sup>、然れども、二支共<sup>一</sup>實<sup>一</sup>再<sup>一</sup>ひ大地  
 磁石力の北極<sup>一</sup>至<sup>て</sup>、合<sup>一</sup>て一<sup>と</sup>かり、東西兩半球の此  
 線<sup>一</sup>近<sup>づく</sup>に隨<sup>ひ</sup>て、躲避の度次第<sup>一</sup>減<sup>ず</sup>、磁石針を携<sup>へ</sup>て、

此線の一方より、他方へ移れば、初め東邊の躲避を爲すの變  
 じて、西邊の躲避とふく、是れ反する者ハ、此と反す、  
 磁石針の此躲避と兼て別れ切要なるハ、其針の歌反、即イン  
 クリナチー是なり、今若し鋼針と、磁石の氣を賦界し、細し其  
 重心を平正の樞紐上より立しり、之を大地磁石の子午線中  
 へ安置する、其針磁氣を得ざる前の如く、復平正の位置を  
 取らば、其平均を失ひて歌反す、其形大地の北半球に在て  
 ハ、其針の北極に向て傾き、南半球に在てハ、其南極に向て傾く、  
 是の如くして、平正線と相畫する所の角を歌反と名くる  
 なり、此歌反あるを以て、平正の磁石針ハ、細密し、其重心へ安

んず可らず、大地の北半球に在てハ、稍南を重くし、南半球に  
 在てハ、稍北を重くすべし、是を以て、歌側大に増減ある遠遠  
 の地へ羈旅する者ハ、針を平正の位置へ安んぜしむるより、  
 或ハ銅錘の小なる者を用ひて、針上へ自由に進退せしめ、或  
 ハ一片の蠟若くハ封泥セルゲルを取りて、針を貼して、其平均  
 を救ふより、磁石針の歌反も亦大地の各處に於て、甚し種々  
 ならず、殊に輿地家の緯度順ひて、變化する者より似たり、  
 此歌反ブリュニスアイキの地にてハ、方今六十六度若く  
 六十七度より、磁石平分線の地にてハ、其針平正とふ  
 り、夫より兩極の方へ進むに應じて、歌反増し加はる、凡て大

地上より、磁石針同一様の歌反ある諸地ハ、別種地圖に線と引て之と結連す、是と歌反線と名づく、其歌反ある諸地と互結連せる線と磁石平分線と云、是平分線ハ、輿地家の赤道線と十分一符應せず、兩度赤道線を切過し、南の方一往くと十五度餘、北の方一距ると十四度四分の三ふり、今ハ是平分線の循行する道路に沿て、其順次を擧ぐ、但し南半球の最南一點の地より其始りを爲す、其地ハ、南米里堅と亞非里加の間、チリニダト島の北、即南緯十四度或ハ十五度一在り、此線嗣て横し南米里堅を經過し、宇露の都の上より、大海中より來り、徐に赤道線に近づき、鐵島初度一百度按するは、鐵島西經ふり、下より

赤道に達す、然れども、之を切過せず、再び南半球に却退して、一小狹弧を爲し、アウスタラの島の上より、赤道を切過し、北半球に來り、横しミルガラヘス島同上と過す、カロリナ島を切過し、殆ど赤道と平行して、更に錫蘭島まで進み行ふ、今ハラケデヘン島印度海セイロン島の西少北に在りの西より入り、再び南に往て、赤道に近づき、子ードルゴイ子アフリカの地の海岸の東より、南半球に進んで、八度の地を切過し、終に原、其始と爲する地に向て返り、此順序なく、屈曲せる線を、大地磁石力の平分線と名づく、此順序なき所以を解するに、各地の原由を以てせんを求

る者あり、譬バエルバ島ハ、鐵坑及び磁石山あるを以て、磁石  
 針ハ、現ニ感動を起すが如き是なり、但是の如き局部の感動  
 ハ、甚採擇す可し似たりと雖、是説ハ、天地の諸景象を務て簡  
 約して、諸の發明ニ應ずべき法律上ニ合するやうし、説出  
 さんとする萬物究理説の需索ニ充るに足ざるなり。  
 大地磁石力の諸説の中、スウェーデンハニステーンの説ハ、尤奇  
 異なり、其説にてハ、大地の内ニ、二箇の十字様ニ交叉せる磁  
 石圓軸あり、然れども、大地の中心を撫循せず、此二軸、其力强  
 弱同トからず、甲ハ乙より強きを、一又四分の三より、其位置  
 を考へ觀るべく爲んとするにハ、大地の内部ニ、一樞紐スベ

ありと定め、其南端ハ、フィンデーメンランドの下、其北端ハ、北  
 米里堅中ヒドソンス港ニ在り、若夫弱磁石軸ハ、其位置シベ  
 リー地方の北氷海及び南米里堅ホールン岬の間ニ在り、此  
 説にてハ、二極ニ非ず、四極あると知べし、第一極ハ、新和蘭内  
 ンデーメンランドの南、三十度、第二極ハ、バビンス港ヒド  
 ソンス港の西側ニ、第三極ハ、南氷海の氷野の南西、第四極ハ、  
 新シベリーの海岸の北、十一度ニ在り、近世幾多の驗查あり  
 てより、此説の無根の話あるを証し、且新説にてハ、唯二極あり  
 て、其兩極ハ、地球兩樞の近旁ニ在るを一定せり、  
 方今幾名海客、精勵倦めて、百般の危嶮を犯して、劬勞を辭せ

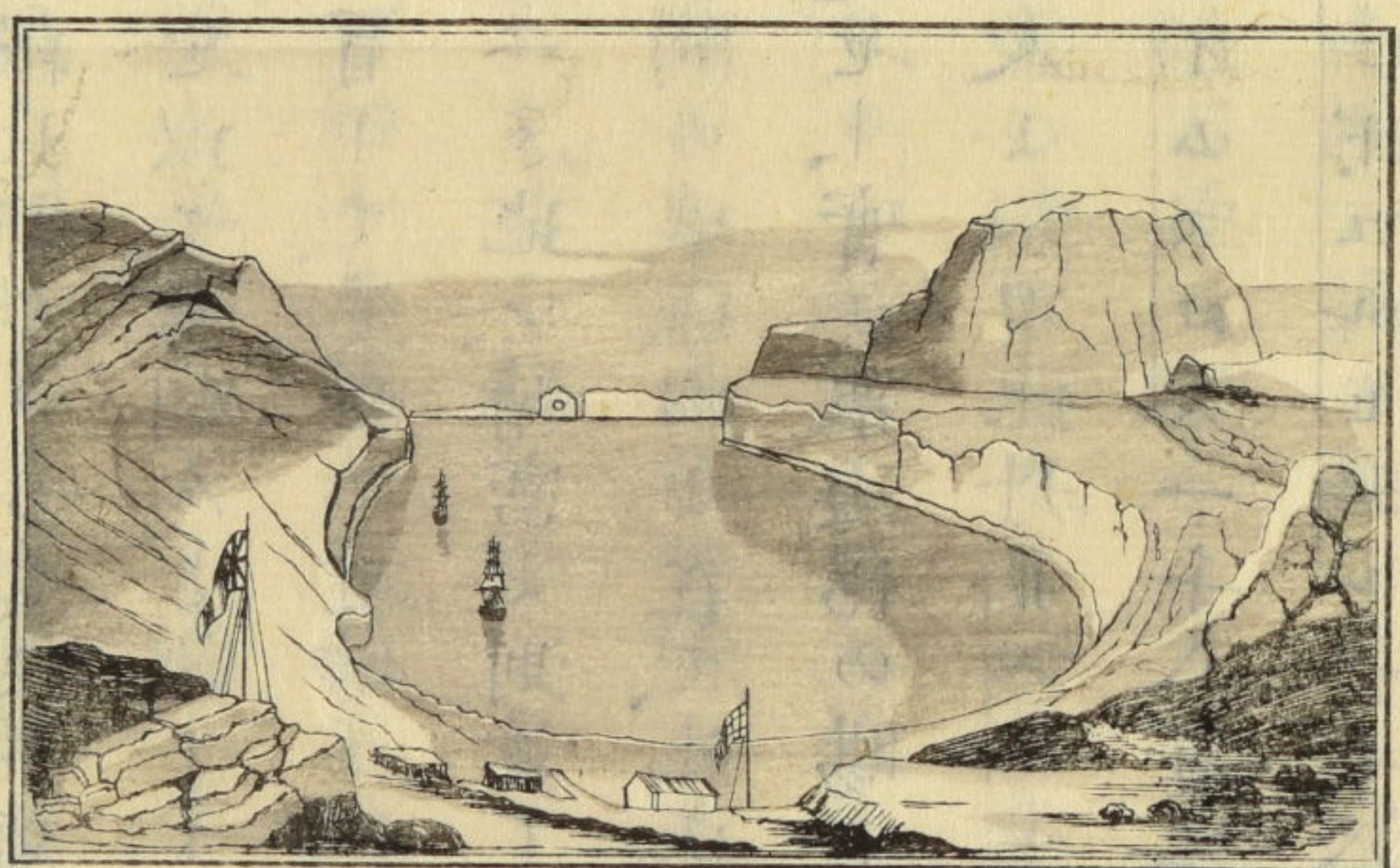


夫因て此一項に就て、明白を致し、今の地球の磁石兩極に就て、十分正確の説を得し至れり、  
 一千八百三十一年、第五月の季某日、甲比丹ヨニコス從前未嘗て人の到り得ざりし、北緯最高度地に於て、磁石針の種の、  
 の恠むべき躲避及び至大の歌反を見たり、是景象よりて、大地磁石極ハ、氷海中、當時其船の居れる地より、甚と遠くらざると証し得たり、是より由て、第六月三十日、甲比丹ロスハ、一切旅装の具を、其船中に遺して、小舟に乗り僅に二人を率し、厚き氷に閉られし洋面に漕入、許多の患難を冒して、其船を進り、只管磁石針の方向を親驗しつゝ、務めて速に布の

望める一地に至らんとせしが、同年第六月四日朝八時、始て其地に達し、因て疑團を氷釋せり、此地ハ、許多の年月を経て、  
 苦辛しとる秘蹟の一點地にして、宇内各個の諸磁石の著しく傾き向ふハ、皆此地とる疑ふべきと決せり、何とふれば自在に泛動せる磁石針、其平正の位置を轉し、歌反するを九十度にして、全く直立すれば、其地丘陵駢ひ立ち、其高五十尺あり、六十尺に至る、然れども、別々目中に歴々たる景色なく、造化此地に彰著ふる者と生ずるとふし、甲比丹ロス此極の近傍に來り、舟を廻らし行し時、磁石針從て回轉し、其北尖を以て、常に此北極の方に向ひしが、極下に抵り及て、此動

全く止ま、大陽の輪狀の旋轉に隨ひて動き、少くも他の運動を現せず、恰も諸患難を免れて、全く静寂せし狀に似たり、是に於て、ロス及び其從者各互に相祝ひ、英吉利の旗を植て、磁石極の全部を、英吉利王の版圖に屬す、其地に大なる石堆及び其下に鐵葉匣を置けり、中に此地を見出し、且所領とふせる文を藏す、若エスキモス北方の人の名此諸物を擾らざらん、一とび此地に到らん人、必ず是を視をわらん、但しエスキモスハ、蠢愚にして、事物を辨別するの識なく、此等の物を見も喜ぶ心なく、其喜び愛する所ハ、別種の物とればなり、ロス他の海客も亦其地に來て、其遺せる物を見と有ん、爲し、其地

ケルギン島の諸島のハルハ内磁石極



の本處を精細に推測し、其高北緯七十五度五分十七秒、グリーンウィッチ西經九十六度四十六分四十五秒と知り、是に於て、船卒ハ、大聲に喝采歡喜し、帽を以て扇さし、エスキモス上にも見ゆも海狗を槍殺して後亦自ら舞躍せり、大地磁石力の南極を查點するハ、未だ其成功の機會に遇ず、通行す可らざる堅

氷の塊段、北部より其延袤廣大にして、徧く南極地方を鎖  
閉せざるを以て、其到んと欲する地に達するを能はず、然るに此  
諸難を冒して、其極の近傍に到り、數百回考索して、磁石力南  
極の在る地を精密に測量し定むると、十分ふるを得し至  
れり、學問の壤域内に在て、此成功を得ると、故らば是が爲  
に艤送せし、實に衆海侶の賜にして、其功遺る可らず、其人ハ  
米里堅人ハ甲比丹井ルキー一千八百三十七年、英吉利人  
ハダイムスロス一千八百三十九年、佛蘭西人ハ、水師提  
督デモンド、ユルヒルレ一千八百三十七年、ハ、ダイムスロ  
スハ、涼き三夏に逢ひ、遠く南緯七十九度まで船を進り、其旅

行中にて、新し發明する所多くして、星學者ガウスが定めら  
る磁石南極ハ、誠の極に非ざる確證を得ると雖も、ド、ユルヒ  
ルレが磁石極を觀察して、宏美の偉功を建し、ハ、此學を弘廓  
する非常の績にして、其功尤高くとす、一千八百四十一年第  
三月四日、ロス精密に、其真極の地に到り得ると雖も、此ハ  
精確からざるの左証を得ると、其証ハ、ロス南の方に進み、磁  
石極よりも、遠く船を行きとると知べし、ド、ユルヒルレも亦  
一千八百四十年第一月、磁石極の近傍まで船を進み、諸羅針、  
盤の針、復と平正ふると能はずして、全く用ふ可ざるまで、歌  
反せる地に到れり、其他、此諸海客の見識、一も十分正確を得

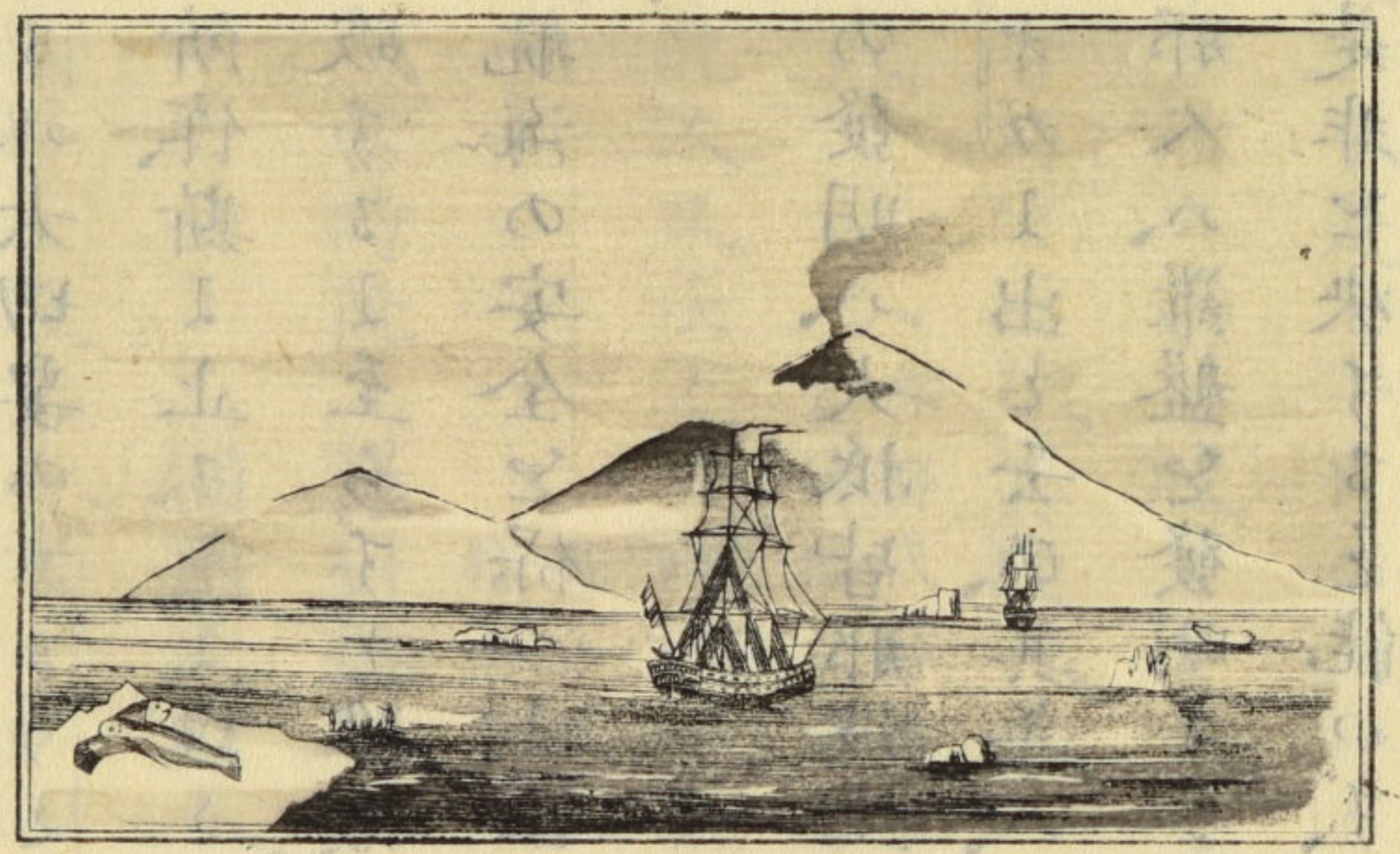
る者ふりりーが、有名ふる佛蘭西の水師提督デペルレイ諸  
 説と比較し、精密し推測して、始て至精至當し真極を確定す  
 る大偉を得たり、此真極の地ハ、一毫の疑ふま磁石南極ふら  
 加之甲比丹ロスハ、彰著ふる磁石力の景象を觀覽する機會  
 し遇ふを得たり、一千八百四十年六月十二日、ケルギエレ  
 ス島中ケルス港内し船を内北、第一圖久しく此し留り居ら  
 んと欲せり、六月廿九日、磁石力の暴作を得たり、此暴作ハ、歐  
 邏巴の諸地しても、皆之を驗し得たり、其非常の作用ハ、器械  
 し感ずると著しきと以て、磁石原質の散蔓する勢の巨大驚  
 くべき顯証を收得たり、其原質大地の中徑を透過するに、光

及電氣の速力し同じ、甲必丹ロス初り北方の極し達せんと  
 欲せし素志し換へて、今ハ更し南方の極し到らんと思欲せ  
 り、是し於て、十二月十二日、其船アウクランズ島新則蘭土の南に在り  
 を去り、一千八百四十一年第一月一日、無數氷山の間を透過  
 し、アンタルキスの近傍し來り、密霧冥濛、風力恬靜し、船  
 を進むると難く、大し時日を玩愒せり、既しして、細雪密灑し  
 て、一切の素志、皆遂るに能はず、英法二百里の海路を濟り、同  
 月九日し至り、始て開敞せる海水し達し、是より直らし、  
 磁石極の地し到らんと志し、遙し遠く南方し進み、同月十一  
 日、其船南緯七十度、東經百七十二度の地し到り、其船と極と

の間、一萬二千尺の山ありと看る、其山ハ千古の雪を戴ふ、  
 光采閃爍あり、此地より更に遠く南の方へ進み入り、磁石極  
 へ達せんと欲す然るに、是に至て、諸の障碍競集り劇甚の颶  
 風南より吹來り、密霧消せず、密雪止時なく、其船を以て少  
 も前進せしむらざらむんと欲する者の如し、然れども、見出  
 したる國土の海岸を查明せんと欲し、同月廿九日、火烟諸島  
 ベアウホルトの前へ到る、此に其高一萬二千尺の火煙山あり、  
 此山を命じて、エレビス山と云ひ、漏斗状の火坑あり、ハ  
 ルロルの名を命じたり、蓋此二名ハ其駕したる兩船の名に  
 取れるあり、第二圖ハ、即ち信据するに足れる地圖なり、第二

月十九日、其船南緯七十六度、東經一百六十四度の地へ達す

ベアウホルト 火煙山 磁石極



故を以て、猶南極を距るに、  
 八十里許あり、然るに、造物  
 此島へ上陸して、切用の地  
 一切近するを許さず、然る  
 と雖も、此船從來に比すれ  
 ば、三五百里遠く乗り入り、  
 此南極の位置上へ説き、  
 北極の本地へ到れる者と、  
 殆ど相符合する確證を驗

一得するハ、大切要の事と云ふと思はざればけんや、海客の所作、斯く止る上、説く發明、尚未磁石力動運の法制と看破するに至らずと雖も、更其業を進むるの階梯と云ふ、且航海の安全を保つ、極て切要なる根基と爲す足りぬべし、

羅針盤の發明ハ、大抵皆那波里人フロタヒオメルヒ又フラヒオギオガト出と云ひ、其年ハ、一千三百二年と云ふ、或ハ支那人ハ、羅盤を發明する本原なりと云ふ説あり、未だ十分其是非を決するに能はず、古記に依れば、一千二百六十年、弘法使者マルコポラオ支那より羅盤を携へ返れり、此人

の話、當時支那人ハ、歐羅巴にて用る如く、磁石針を其重心上、一支一ず、是を一片のギルクの中央に駕し、水上に放て、十分期する所の効を收めりと云ふ、此設施ハ、甚と簡約にて、大に智巧を極む、其故ハ、水ハ自ら毎に必ず純乎なる水平と成を以てあり、瑯琊代醉編、推蓬寤語、術家鍼盤用水浮鍼、視其所指以定南北、云、傳、星尾用旱鍼盤、云、不如水鍼盤、此人又云く、支那人の説ハ、紀元前一千二百年之細密、周公の訛り、史記に、指南車、周公旦所造、ハ、星學に精通するに當て、帝シニングス、の名あり、當時既に羅針盤を用ひしと云ふ、此外猶羅盤を發明せりと云ふ二個人あり、

佛蘭西國學士數名ハ、ダオヨト、デプロヒンスの詩人、の詩

と引て、其証とす、此人ハ、一千二百年の頃、生れ、羅盤とマ  
リ子と名つけ、其説を作れり、又羅盤の北と指す針尖ハ、  
佛蘭西の國章百合花と附く、是佛蘭西人之と發明せる証  
ありと云ふ、

英吉利人の、コムバヌ羅の語ハ、元英語ハ、ハ、羅盤ハ、英人の  
發明ふりと云ふ、是蓋之と假て、其國人の名と誇り、や、若ハ  
彼實之と信じて、然謂り、や、姑く舍て論せず、但ハ、羅盤ハ、  
英國人の發明する所にして、又英人總て善く羅盤を用ふる  
とと誇説するの事ハ、信し然らる、

婦人イダヘムヘル地球周遊の記

千八百五十五年刷  
荷蘭語函第六十六

至七  
十葉

婦人として、稀なる天の顯象均しき名を得たるの魁たる  
者ハ、實に有名なる獨逸の旅婦イダヘムヘルなり、○其游記  
と録せる人カルルムト曰、此婦人の周遊せる路の廣衰と  
視る時ハ、婦女として、最多く行旅せる者なり、故に亦中古の  
先輩有名なる遊客子テヤ勿擲茶人マリス、ボロ、都兒格人イブ、ロバ  
ウタ、ら、久、遙に提出せり、其故ハ此兩人の爲るが如く、舊世界  
の三大洲也、縱横し周行せる身から、又新世界亞墨利  
加及澳大利亞に達し、且諸大洋を縦遊しければなり、○此紀  
者、其婦人の最終に、廣大の行路を周遊し終らざる前、此の如

く説と久○此婦人の手記せる讀子に據バ其第二回の地球周遊を全く成し終り三年半を經の後近時倫頓に到れり其行路の事を説く前に讀者をして此婦人の一二絶倫なる事を知りしんとす  
イダへムヘル其行記の序中に云るあり曰く壯ふり一時に頻に游歴を欲せしが其家族の雜事に沮され當初の全志を遂ざりし○然共其二子成長して高人とふり且其夫の死せると以て一身自在にふりし久其曾て地球上の諸方に在る造化の奇異なる事を目撃せんと欲せしと其少年の時比すれば更に盛旺なり○其齡ハ既千七百年代の生ふ

ると以て女とも障碍の事故なくして旅行し得べく母との務を全成し二子を養育して幸を得せり且他の諸事の此婦を結束するに無と以て名利の思を去り身を其好みに任ずるの時を得たりと思ふ○此婦困難危害のこふらざり死亡とも恐れざると以て縱令其道路に斃るとも安んじて之を受け化工の造化力の大ききを觀て過せし安全麗美なる時日を實意に化工に謝する爲に○斯の如き志あるも讀者其婦女に適せざるとを咎むる勿れ

カルルタル曰く此婦此の如き非常の性質を遂しむも亦可ならずや○此婦勇しき全世界の周遊を爲て心を悦しめ



以て其宿志と達せり。○化工是の如き婦人と造出するに就ても亦其知巧に富ると、遙に學者の知識の及びざるを證すべし。

イダヘムヘル其又く貯藏せし錢貨を集て、其發途を耶路撒冷及びヘイリヘランドの方より取れり、其故ハ此婦既に前時よりヘイランド神の出顯し、其守護して、安全に此諸地を遊行するの大幸あるとを夢しを以てふり。○其周遊して視る諸事と驚愕し、夫より再び家より歸り、

其貯蓄の適度ふると、身體の過度に健壯ふるとを以て、成得る行遊の歴驗、此婦として、甚速に其第二回行旅の志を起

さしめり、而て今次ハ、一千八百四十五年に於て、斯干釐那委阿及び裸禿せる氷州の方より發途せり、此旅記及び第一回のパレスチナに赴ける旅記ハ、共に刷行して、世に流布せり、然れ共、此に至て始て、一千八百四十六年より八年に至るの三年に於て全成せし世界周遊を思ひ起せりと見ゆ。○其行旅ハ、亞墨利加及び巴悉と越へ、角岬を廻り、智里を通行し、阿他害地に至り、夫より支那に航行し、遂に東印度に達せり、チグリス河を浴て巴比倫及び尼尼微の廢趾に至り、夫より時々危害ある地方を横過し、モルデン及びペルセンの地より高加索に登り、魯西亞の南部を通過せり。○夫より君士但

丁及希臘を越て家歸れり而て其快美なる諸事及び夥多  
ふる見聞を簡して、然も法に協ひ且虚飾なき語を以て記  
し、三卷とふし、一千八百五十年に於て、維也納にて發行せり  
此非常にして、既に老ひ且外貌平易なる婦人、障碍のなき  
粗暴なる人種の國を經過し、勞ふくして、支那、鳴來、印度、波斯、  
亞拉比亞、トルコマン、トルド、ベドイン、及び都兒格の諸國に  
遊行し、多ハ優待せられ、又屢招請せられり。○多くハ先  
つ其諸地の婦女に接し、之と共に、其卑下なる屋に入り、身と  
其婦に齊しくふるし、粗畧なる食を設けらるゝとも、親く之を  
受け、纔に其業を助け、又小兒にハ、細貨を與て尤も樞要なる

所業禮式、及び勉強すべき事件を教へ、且多く有用なる家計  
を教へ、以て諸人の愛せられ、粗暴なる男子と雖も、憐愛する  
に至れり。○尤粗暴なる野人、此貧婦の杖を手に取りて、是を  
導き、平地を行き、或ハ家より家へ導き、且其貧にして卑  
野なる人種と雖も、多くハ之を客待せり。  
此夥多の目撃せる遭遇あるも、其遊意尚止まず、更に地球中の  
夥多なる地方を、探索訪求するを務るの思を絶ざり。○  
一千八百五十一年の春、更に新路を求めて龍動に至り、此地  
にて、預め其尚廣大なる第二の世界周遊の策を定めり。○  
一千八百五十一年第三月二十二日に龍動を發し、一二の旅

客と共に常帆船に駕して、八月十一日、初喜望峯に達せり。  
○其預定の稿に據る、此處より亞弗利加の内地に入る可  
かりが、不幸にして、其如くふるを能ざりし、而其自記に曰く、  
予既に其初にハ、此國の内地に旅行するその便宜を得りし、  
○彼此に由て、此内地に栖住する者ハ、何地にても、皆其性の  
善良なるを、及び予が婦人とするを以て、實に予より先とら此  
地に至れる數男子より、深く内地に入り得べきをと決せり、  
而て予に、其未詳の河湖に至るの路を教へ、且尚遠く行く可  
きと示せし者あり、然れども、予ハ此良好なる景況と希望と  
に關せず、其教へし地に至ざりし、○此地にてハ、人皆車牛馬

驅及び高價なる導誘者等の諸物を買ふ可とを説き、○此を  
以て考る時ハ、予何を以て、僅百ポンド、ステルリングを以て、  
今此の如く遠く來得しや、○予尚此月の内に、和蘭の田夫等  
と、共に小ウルリヤムスの方より小旅行を爲と企し、是此地  
にて、行旅を爲の始にして、又其終末より、  
イダヘル喜望府より印度諸島の諸部を巡視せんと欲  
し、新嘉坡の方より發し、其最大最美なる佛尼島に至りし、是其  
第一として遊覽せる地あり、而て其北岸なる英吉利の保守  
せるサラワカに到り、此處より危險なるダヤクを經て、其内  
地なる尼達蘭領を過ぎ、此島の西部に達せり、○或人ダヤク

中一ハ食人の地ありと云レガ此婦少くも是を驚怖せざりし○シカルランに浴て、英吉利法七十里の上流に溯ル夫よりハ河に浴て、百里の遠地に行き、スカメル山脈に達せり○此山脈上、凡二十里の處に、ダヤク人四人、獨木舟に駕し、速走して此婦に向ひ來りて、我舟に在る人を呼て、近傍の人種、戦闘中にして、人の通行するを許さるを以て、速に逃れ歸るべしと命トさるる○  
イダヘル此に於て、其共に來れるダヤク人の内、僅に英語を爲す者あるを以て、其衆と是を議せしが、皆悉く歸路に赴くと急げ共、其内の一人甚豪にして、之に一致せず、此山

脈の前方にてハ、ラヤグロケの旗を以て、諸ダヤク人種中を通過し得べし、これ其君長、其臣下の一人をも害することを好まざればなりと云り○婦人此説に従ひ其旗を建て、行路を進めたり○既數時を経たの後、タムタムの響に應じて、人の叫聲を發するを聞け夫より速に川の曲折を廻りし時、沈勇なる男子と雖も、恐怖すニミの事件起れり○ダヤクの人種、男子婦人小兒、統て河邊の阜に岡上に集まれり○ヘルの舟見へたる時、忽ち叫聲を重ね、恐くハ軍歌の類ふるべし、且つ是と共に樂曲を始め、土人各異なる状態を爲す○前面に當りて、高三尺なる數箇の堡障あり、裸體なる粗

男子、其後よりありて、皆其パラング短廣なる刀の類を鎧ひと  
り、○川の中流、此岡に對して沙洲あり、彼猛ふる指揮者數個  
の舟子を率ひ、皆パラングを帶て陸に飛上れり、○爰に於て、  
會議を始め、其會議中、衆男子忽ち水中に身を投じて、其  
舟を圍ふ、又舟上に登れり、○ヘイヘルハ、此衆人の友情を以  
て來れりや、又ハ害心ありて來りやと知ざりし、若其事件  
の時ハ、此婦人も其從屬も共に死を遁るゝと能はざりし、  
ん、○然れども、幸して其疑惑速に解たりき、○一ダヤク人  
此婦人に近接し、此婦人を扶けて舟より陸に上らしめ、一假舎中  
に到らしむ、是其人種中の酋長なり、○婦人此處にて親

く待遇せられ、而て止むとを得ず、其婦女等と伴ひ地上に坐  
卧し、且マイス粉にて作れる、各種の甚粗惡なる食物を食せ  
り、  
數時間此人種中に留まり、其教法及び設用を知り、後、是に隣  
接せる人種に至るの教導を得たり、是を以て、其行旅に就て、  
佛尼ボル子の中部、シンタグとして、此西岸より、英吉利法一百四十里  
ふるの地に達せり、○此處にて、其酋長甚能待遇せられ、夫  
り其酋長の舟に駕りて、カボ子ス河に從ひ、尼達蘭領の一府  
ボニチナクに到れり、此行旅ハ凡英吉利法二百五十里の路  
程なり、

婦人へんヘルハ再び行旅をランダキの有名なる金坑及鑽石坑の方より爲り、今番ハ和蘭の政官懇切ニ是を扶助セリ。佛尼ニ於て、其自記するが如く、衆多なる珍奇を見て、是を其日録ニ記し、夫より瓜哇ニ行き、又沙馬大刺ニ到れり。○瓜哇の蘇兒把牙にて、一千八百五十二年第十月十二日ニ手記セリ。此婦人の簡牘中の主件ハ左の如し、予爰ニ留在りて少許の間暇を得りて以て、汝ニ予ガ近今沙馬大刺食人の地と行遊セしとを語らん。○此行遊ハ、予ガ初稿ニハ是を爲すと定めざりしが、巴達維亞にて逢ふ獨逸の商人甚懇切ニ予ニ水蒸船にて沙馬大刺ニ至るべき便

路の地圖を恵り、故ニ予此島の和蘭領の首地なる把東ニ到れり。○予ガ爰ニ來りたる時、直らニ其鎮臺ハニスウイン君、甚懇切ニ予を迎へ誘へり、然れども、予爰ニ留るる數日にして、騎セざれば能ざる其内地ニ進行せり。○夫より始めて止りハ、執政ハニデルハルト君の在り、ク城路程五十パアルなり。○此執政予を扶助して、此後行旅の稿を造らり、且數個の行路及び日々留止すべきの地處を教へり、是ニ加ふる、其獨立バタカ國の境界ニ至る迄、彼此ニあり有司ニ投ずべき數多の書牘を書て予ニ與へ、其書中ニ予を好く待遇す可とを請ふ。○此執政ハ、其地域の諸方を甚詳密ニ知

れり、其故ハ凡十年前、此國民と野戦を爲し、セリングド  
 ンヤで進入せしを以てあり。○然れども、予が目的ハ尚遙ク  
 イールタン湖に到んと欲せり。○斯の如く心を定め、運と天  
 一任せ、以て其路程一就けり。  
 又曰、予が最終に歐羅巴人ニ逢著せし地、パダング、シテム  
 カング(路程二百パール)ニ至れる迄ハ、頑として未だ騎一熟  
 せざる馬と争ひ、之が爲に大に勞せしものとあり。○此馬時  
 としてハ、又飛聘して僵樹及び株根を越へ進むとあり。○此  
 地ハ、虎、象、犀の猛獸充滿しけれども、白日の間ハ是を怖る  
 べきの患なく、且時々數里間一亘りて茂生せる樹叢及びア

ラングアラング(三四尺の高ふる草の中を通過するとあり、  
 ○斯く爲して大小のマンデルリングと、アニコラを過ると、  
 ○アニコラのバドシにてハムメルス君の家ニ至り、爰に留  
 るると二日あり、其故ハ、此處にて先導を索めざることを得ざ  
 りばあり。○ハムメルス君亦予を爲し數個の侯伯、並にエイ  
 ールタンの女王一の許多の書牘と、バタリカ語して書贈れ  
 り。○諸事整ひて後、予實意を以て、此最終に遇ふ歐羅巴人  
 別と告げ、バタリカの先導と、共に程を發せり。○路程凡二十  
 パアルの間ハ、予尚騎しを來りしが、是より徒歩せざることを  
 得ず。○其初三日の間ハ、予曾てふせし行旅の内にて、最困澁

ある路ありき。○此地ハ、連綿として行通す可らざる草叢にして、屏の踏み荒せし處、又ハ高くして人頭を越るアラシグアラシグの中を通過し、或ハ湿地泥濘を越へ、又ハ險なる邱陵を上下する等の路にして、多くハ赤足にて之を跋涉せり、其故ハ、此泥地にてハ、靴の泥中ニ脱留する患おればあり。○且、此湿地ハ、夥多の小水蛭ありて、體ニ固著し、又アラシグアラシグ足を切り、時に堪ゆ可らざる疼痛を發し、其既に創を蒙りたる處を再び刺す時ハ、其痛殊ニ甚しく、且草叢中ハ、其刺棘ニ苦めり。○予各夜其アラシグアラシグの刺片を、最勝れるバターカ人を以て、其鈍き小刀を以て、除りりざる

とを得ざりし。○此路中にて、一河流を涉過せしが、其水予が頭上を越へて走流せり、此時二員のバターカ人予を扶けて、此水流を越さしりり。○一日として、雨有ざるハ、然れども、予が衣及び布品を換ふる能はざりし。○一夜草叢中ニ露宿せしが、此時ハ、虎及び蛇を甚ど恐怖せり。○此の如き恐怖ある耳あらず、予ハ尚毎ニ冷地上ニ卧し、且屢半熟ニ炊きて乾燥せる米飯ニ、少く鹽を加ふる者と食を以て、足れりとせざるを得ざりし。○此草野中ニ宿せし夜、全く新法にて飯を炊くを見たり。○其法ハ、米を大なる葉ニ包み、之を新に截する竹筒に入れ、少量の水を注ぎ、之を燃火上ニ置くと、其



竹の燃へ始むるに至れり、但其竹の新しうして水液あるを以て、其時間甚長うりし。

又曰、第三日の夕に至り、バタカの第一ウタ村に著せり。○此處に至りて、既に土人の予が行通を拒むに遇り。○幸うラジヤ人ハリボナル周遊を爲んが爲に、此處に在り、此人ハ嘗てバトシに於て、ハムメル君の處に在りて、以て、予其君より是に送るべき令狀を携へたり。○此人予が爲に、紹介せしを以て、予其村中に留ることを得たり。○此に於て、土人予が輩をして、四面を閉ざりし小屋に行しめ、且米を與へたり。○ハリボナル予とエイールタン迄導きて行べきを約せり、此地ハ茲と

距る、尚凡七十パアルあり、

又曰、其次日此行程を進めて、ハリボナルのウタに著し、其次日も此に留れり。○ハリボナル予と饗するが爲に、一犢と屠れり。○予此屠祭の處に招きしに、音楽舞蹈を爲て此獸を屠殺せり。○細心の其血を器中に受け、肉を數片に截り、且其最貴重せる肝を予に贈れり。○此間常に其舞蹈を止めざりしが、若し此舞蹈惡魔に供ふるが爲の者に非りし時ハ、人をして善心と起さしむるに至るべし。○バタカ人ハ、常に唯一惡魔を尊奉せり、是其怖る者なればなり。○彼等の説く善神ハ、必しくも崇むるを爲るが爲に、故に是を拜祈するを要せず

とせり。○二個の舞人、甚自在に飛動し、數分時の後、其内の長者、水と盛たる水牛角を採り、其舞蹈間、數天に向ひて之を捧げ、以て幸を祈ると見ゆ。○夫より其水の一分を予及び其徒に注ぎ、其餘を民に注げり。○又米及び小餅を以て此の如くし、其小餅を予とのみ與へり。

又曰、此舞蹈後、又第二回の舞蹈を爲り、是ハ其死す可し定りたる人の譽の爲る者あり。○是が爲しサロングと木扨を結束せり。○其甲ハ是と死し定りたる者、乙ハ是と其樹木と定めたるあり。○夫より音樂に従て、其木扨を回りにて舞蹈を爲り。○此内の一人、列中より躍出て、其バラング(長き小刀)

を以て、囚人を突の態を爲し、其次、第二第三等の人、次第は是に従ふ。○其第一突を爲する人ハ、此敵に對して最權勢あり。○此囚人死せりと爲る後、其頭を截斷するの態を爲り。○夫より人頭の代りし、積頭を蒲席上に置き、其周圍を烈しく是を飛越せり。○時々其舞蹈せる者一人、此頭を高捧し、好て其滴血を吸り、其他の者ハ、此席上より身と投して、其血を紙拭へり。○此時此輩の顔色ハ、哀憐豪猛の状なく、喜怡得意の趣あり。○其鼻、目、足、心、頬、掌、及び肝と最美の部とし、始の三品ハ、其權勢ある人の有とふせり。

又曰、此祭の次日、又程を發せり。○此獨立バタアク人の國中

してハ、歐羅巴人の面と見と甚稀あり、一千八百三十五年、歐羅巴人二人、此地に到りて、土人の爲に殺し食はれし以來、殊に然り、○故に予の來れしとを通知せしと、殆んど流火の走が如く、忽ち全國に流布せしハ、自然の理あり、○予が通過せし各村毎に、其全衆の男子、羣立して、予が行べき路を斷ち、又忽ち其男子予を圍繞して、圈を爲し、皆槍刀、露身のパラングと携り、○其容貌の兇猛にして、恐怖す可と、筆紙の及ぶ所非ず、○其體ハ大にして強壯、其顔色ハ醜惡なり、口ハ大にして、其上顎骨、殊に甚く突出し、多くハ其齒、長く挺出せり、○其髪ハ、長ふるあり、短ふるあり、其短ふる者ハ、刷毛の如く上

に向いて起立せり、○頭は汚れたる綿布を纏ひ、或は染たる布片を被ひ、稿にて之を結び、其中に編稿の小笠を蒙れる者有て、其形甚方籠に似たり、○各人一個の耳朶に大ふる孔を穿ち、是に一二の巻煙草を挿せし者あり、○且其人ハ全身に服を著し、一のサロングハ、體の下部膺に至る迄を掩ひ、又其一ハ上體のくを掩へり、○其叫聲ハ甚驚くべし、而して彼等予を是より先に行り、自ら頸蓋を指て、予を殺んと欲すの意を示し、且其手腕を嚙て、予を食んと欲すたと諭せり、○予先し斯の如き兇猛なる人種に遇はりし時ハ、爰に至りて、予の銳氣忽ち屈す可ん、○予思ふに、此兇猛人の心を最能く

屈せしむるハ、獨我克己と友情とを以てするに在り、是を以て是に答るに、下の詞を以てし、予ハ汝等の予を殺さざると、予を食ハざると知り、室むらくハ速に予を前路に行しめ、汝等予の同行人、疑惑有るハ、唯汝等のと伴ひ行べし。○此時に語りし予の欠溢る詞と、予が示せし體様安意及び友情、遂に此兇猛人の心を屈せしめ、彼等親愛ふる聲を以て接話し、手と予に觸れ、許して前進せしめ、或ハ其村落に宿せしめ、且食物を與へしめ。○此兇民をして、暴劇ならざらしむるハ、纔小物品を以て足りとし、和順ならしむるも、又之を以て足りとするべし。○故に予常に之に小物品を與へて、其意を沈

静せり。○古の如く爲し、數日の行路を経て、終にシリンドシグと云る佳良ふる地に至れり。此地ハ沙馬大刺全島中、予が見しもの、最大最肥饒の處なり。○其長凡十五パール、幅凡五パール、高山是を圍ふなり。其山ハ沙馬大刺の南より、東に向ひて横亘せり。又曰此地に在る人民、甚夥多し。多の村落散布せり。○其村落ハ五尺より六尺に至るの土堤にて圍ふ、又竹或ハ他樹を以て籬と爲し、且多ク細溝を以て之を圍匝せり。○其家屋ハ更に見るを得ず、是四五七尺の高ふる竹、其全村を遮隔すればなり。○此平地パタンダトーン河の清流及び一二の

小流あり而てウビ(芋)の類を多く植耘し、且多の水牛圃及び牛の牧野此諸地其甚夥多あり  
 又曰予今筆紙の及ばざる此人民の不潔あると、負擔獸の如く使役せられし婦女の不幸及び予が三值日此人民中に在て見し所の禮教習俗等を説きしを、唯此の如く諸厄に逢遇するを厭はずして、エイールタン湖に至んが爲に勉勵せしむる共、遂に無益と成るとを記すべし、○導者の説に據れば、予の至りし行程ハ其湖より纔に十五或ハ二十パールの距離ありき、○若岡頂に上れる時は是を見ざるふるべし、然れども予を是より先し伴ふ者無りし、○導者エイールタンの土

人と不和にして、此地に至れば、大危害有んと云ふ  
 又曰古來の歐羅巴人に比すれば、予がバールタカ國に入り、ハ十二パール深しとす、○然れども土人予に患害を加へざりしハ、實に予の友情あると婦女あるとに由れり、○バールタカ人も亦ダヤク人の如く、予を神として待遇せり、○土人予に告て、若予神に非る時ハ、一二の補助守衛人なく、獨此衆中に至る可の意を、生ずるを無る可と云ふ  
 又曰予が沙馬大刺の行旅、其七百二十一パールハ騎を以てし、百四十六パールハ歩を以てせり、○予熱を憂ひて、パタンに到れり、然れども、強質ふるを以て、速に快復し、爾後更

行旅せし夥多の知報を爲んと欲す  
 イダヘム、ハ、沙馬大刺を發し、摩鹿加モルユエケンに至り、夫より新入ガイチア匿  
 に入り、又澳大利亞アウストラリアに至らんと企せれども、遂に其意を果さ  
 ず、○金坑を發明し、歐羅巴人の此貴貨を欲念して、此地に輻  
 湊し、是が爲に、其國內の物品高價と成り、其澳大利亞に至  
 らざりし基因とす、○然れども、夫より之に齊しき多金の國、  
 角利弗爾聶カリホルニアを發せり、  
 一個の亞墨利加人、此婦を隨意に其國內を周遊するを許せ  
 るを以て、好きて其行遊をふせり、○其此地に到れるの路、六  
 十日間、見る者唯水天耳、ふれども角利弗爾聶の海岸を見り

に至りて、以て少くも其喜色を顯さるり、○其府佛蘭息士  
 哥ハ、總云時ハ奇とするに足らずと雖も、之を甚驚くべき壯觀  
 なりと記せり、○此地にハ、遊逸者ありと、把里斯及び倫頓よ  
 りも夥し、而て其市中の不潔なるを、遙に觀斯頓フリスダン丁羅布チノブを過  
 ると、○堆積せる塵沙地を覆ひ、且糞穢市中に横り、箱桶瓶壘、  
 衣片、布片、及び死せる犬鼠、彼此に縱横せり、○此府内を散歩  
 し、或ハ僅に郊外に出る毎に、必ず悔むの意を起せり、其故ハ  
 道路常に積沙中を歩するの艱苦有るなり、  
 角利弗爾聶中を數回散歩し、後船を駕りて里麻に至り、  
 秘魯ペリウの一部を過ぎ、アマゾ子河の流出する地方に至り、エキ

アドル中の祈多フイトより、シムボネソ及びコトバクシシに行き、夫よりキアヤコイルの方ニ歸り、巴那馬バナマの地峽を越へ、新珂涼オルレ士アス一行キ久ク○夫より美士細比河ミシラシビを溯りて、シントアントニの瀑布ニ至り、夫より側路ニ沿て、ニアガラの瀑布ニ行き、終ニ貴壁キエバクより波士頓ボストン及び紐育チヨウヨク至れり○此處より又船ニて英吉利ニ行き、前年一千八百五十四年の第十二月、再び上陸せり、  
 此婦、角利弗爾コリフルより送れり書中ニ曰、嗚呼若予尚十歳壯ふりせば、此行路を尚廣大ニふらりめん、然る時、予ニ著述簡ニして、見聞ハ却て多ク至るべし

婦人イダヘムヘル、今ハ其刷行すべき遊記の爲ニ、勉勵せり、  
 ○其前時著せる遊記、左の如し、  
 其一、一千八百四十二年、維也納ウィーンよりヘイリヘランドヘイリヘランドに至り、此婦人の行旅二冊、一千八百四十五年、空ク子コにて刷行、  
 其二、一千八百四十五年、イダヘムヘル、斯シ千厘那委阿シカンジンナヒの北西部及び氷州の行旅二冊、一千八百四十六年、ペストペストにて刷行、  
 其三、一千八百四十六年より八年ニ至れり、イダヘムヘル、其の世界周遊三冊、一千八百五十年、維也納ウィーンにて刷行、

支那の香港島

千八百四十三年刷荷蘭  
瑤西第三百三十三四葉

此島ハ方今不列顛の本領ニ屬シ、是迄他邦の諸民ト、生計と殊テ共野鄙ふらざリ三億六千萬の支那人ト、常ニ禮義正ニ世界と唱テ、能努力シ、多事物を思企シ西洋諸國人との親交と結ベシ爲の尤利益多く、尤巨廣ふる貿易場と爲ビト、香港ハ崑石多シ巨海中ニ在リ諸島の一ニシテ、廣東の河口ニ近く相對シ、この一群の諸島中ニテ、最北方ニあり、最陸地ニ近くシテ、一里より六里の海峡を隔テ、緯二十二度十七分、經百十七度十二分ニ當リ、澳門の東四十里許ニシテ、廣東の東百里許ニ在リ、其長八里許ニシテ、廣ハ五里あり、其地崑石

多く、遠く望バ怖ラズ景色あれども、是ニ近づケハ、其山間の土地美良ニシテ豊饒ふる者多シと見ル、其地水多クシテ且美ふる、此島名ハ支那字紅江ホンキヤンの轉訛する者ニシテ、紅流の義ふる、蓋一河の流リ、土地の色を以て名づけけり、其河美ふる瀑布とあり、港ニ近シ礁上より落テ港ニ入ル、新シキ水と來リ汲む船、是ニ由テ、大ニ便利を得るあり、土人の員數を記する諸説一ならず、千人より七千五百人ニ至ル、然れども、近來の諸説皆同ク、英吉利人の所領と成リ以來、人大ニ増セウと云リ、其一人加比丹ビングハム氏ハ、方今一萬五千人ありと算セリ



此島の尤も大なる利ハ其殊勝なる港一在リ恐クハ全世界  
 中是一勝者なく、是無數の諸船其内一滞泊するに足るの  
 一非ず、暴風及颶風を防ク、安全なる碇泊處なれば、  
 是を以て之を見、支那全國の諸港一も是に比すべき者な  
 く、又海岸一近ク、水深く、浦内大抵岸より一カ一ベ  
 ルレングテ二百三十一碼の處、七十四門船を碇泊せしむるに足  
 れり、此形勢のよ小ても、此島の商賣の爲に大利あるを見る  
 一、全島中勝秀なるガラニート石の河渠ありて、倉廩ハ大  
 小多種の倉廩と、此渠邊一建て、連ね、磴道埠頭を造りて、諸船  
 の貨物を積卸するに、甚自在ならしむ、又年中飲服すべき新

水影

其他、此島の利多り、北方ハ、山脉連絡し、海面上に聳る  
 ると二千尺、○此諸山ハ、唯一分を除くの外、元禿にして種藝  
 と施さず、黒ガラニート石矗立し、其間一雜草矮木を生じ、著  
 大なる樹木なく、又他の山地の如く、溪間の平地少く、又甚狭  
 隘なり、諸山多くハ海中に直立し、其脚下ハ、僅に人家を建  
 て、耕作の地を殘す耳、○此島の内地、及び南方ハ、平地多く、北  
 方ハ、比すれば、人家を建するに、大に宜しと見ゆ、又此に好港數  
 處あり、其首なる者とチ、タン及び多クピ、ワンとす、チ、  
 タンハ、軍營あり、多クピ、ワンハ、チ、タンと距ると、五里

香港浦并其近地之景



の地は在り、  
造船場等と  
置し甚宜と  
地ふり、此島  
は、山雞、鶉  
鶉、あり、高く  
茂り、とる野  
草中、雉及  
び赤き野獸  
と見ふ。○著

大ふる半土は、少許の支那人の居住し、コウロト街の  
南東に斗出せり、此地多し平坦にして、物類生産し易し。○香  
港府の外観は、其他、人目を奪ふ者多し、其氣候は、任に慣し人  
は、甚宜し、丘阜は、草木多く繁茂し、雨久しければ、其土、泥  
濘水潦多し、コウロト湾の側は、大氣常に清浄にして、天氣  
の急變少し、諸事を合せ考ふると、此地方は、香港なりとも、人民  
を植るに宜しと思はる、然るに其氣候は、恐るべき害ありと  
少く、颶風、暴風雨等の恐怖あり、天變も、港内の水利を改正  
し、家屋を高く且堅牢とせし、其安全を保つべし。○當時此島  
に居り、英吉利人の説に據り、千八百四十一年、七月二十

五日の朝より、二十六日終日の間、大暴風有りて、家屋盡く倒れ、諸物相撃ち、人命財貨を失ふと甚多し、大氣稠厚なり、其壓力呼吸を苦むるハ、常ニ此暴風の前兆なり、其地の住人ハ、是ニ因テ、暴風の近づきとを知りて、未曾テ誤らざると、恰も驗氣管ニ異ならずと云り、按ずるニ、大氣稠厚壓力強大ニ述者の誤りして、驗氣管ニ異らずと思ひ、此器升降の理を知らざると見ゆ、上の圖ハ、香港島上、一小溪を成せる水邊の地なり、此灣を越テ、近處ニある、コウロンの高地を望むと、風景を寫す、此處の海口ハ、砂汀ニ向ひて甚狭く、處として突兀稜角ある崑石ふらざらば、其狹隘なる谷の中央ニ、一大崑石の塞り

り立とると、土人智力を竭して、妙ニ利用を足さしめたり、即ち此崑の頂ニ、小溝を穿ち、其兩方ニ大竹の中徑一尺半あり、二尺許ある者と架し、水を導き、之を以て谷上を越テ、此方より彼方ニ流し、更ニ他地の乾枯して實らざる地ニ灌ぎ、以て種藝ニ便し、始テ此竹規を見り人ハ、隘溪の間ニ、狹長しして脆弱なる橋を架し、とくと看做ん、

玉石志林卷之一終

五石志 卷一  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

